



## 白血病の仲間を助ける活動から 骨髄バンク支援へ広がった募金

### 沖縄県 株式会社ピータイム 「骨髄バンクへの募金活動・ ドナー登録推進・患者の支援」 事業



株式会社ピータイム  
代表取締役  
木村光一郎さん

#### 選考理由

現在、白血病など血液疾患で悩む人は年間6千人、多くの患者は骨髄移植を待ち望んでいるが約半数は移植を受けられない状況だ。沖縄県遊技業協同組合傘下の株式会社ピータイムはひとりの従業員の白血病発症を機に骨髄バンク支援事業を開始、平成20年から支援団体への継続的な寄付やホールでのドナー登録推進、募金協力の普及活動を行ってきた。特に、従業員自身のドナー登録には特別休暇を付与するなどして奨励し、骨髄バンク関係者からの感謝はもとより一般市民の共感も得ていることは高く評価できる。

社会貢献活動審査委員会  
委員  
永井 多恵子氏



#### 白血病になったホール従業員を 助けるために全社で募金活動

地元出身で、ホールを訪れる遊技客と一緒に働く同僚たちから愛される青年だったという。2007年2月、石垣島にある「ピータイム石垣」に勤務する当時30代前半の青年が、熱が下がらないと体調不良を訴え、病院で診察を受けたところ、白血病と診断された。石垣市の病院では治療が難しく、那覇市の病院に転院、さらに福岡市の病院に移った。

その治療費の一部にということで、店長をはじめとする同僚がお見舞い金を贈ったが、支援はそれにとどまらなかった。ホールカウンターに募金箱を置き、お客様にも募金を呼びかけた。その活動はすぐに本社に伝えられたが、長期療養が避けられないとわかったため、総務・人事担当からの提案により、全社を挙げて青年を支援するための募金活動を展開することになった。募金箱はピータイム全店(当時10店)のカウンターに置かれ、お客様に募金をお願いする一方、ホールのスタッフが休憩するバックヤードにも置かれ、そこにスタッフも一刻も早く帰ってきて欲しいという願いとともに募金を入れていったという。

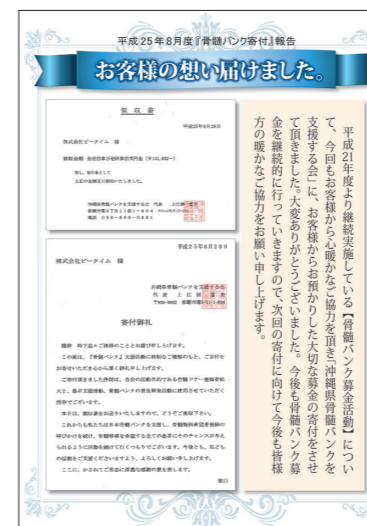
しかし、その願いも空しく、青年は約2年後に還らぬ人となった。当然、募金活動は中止すると思われたが、そうではなかった。生前の青年を見舞った際に、白血病に苦しむ人を何とか支援できないかという思いを強めた木村光一郎社長や総務・人事担当が、地元にあって経済的に厳しい状況にある「沖縄県骨髄バンクを支援する会」のため、



ホールに設置された骨髄バンクへの募金箱とドナー登録を呼びかけるチラシ



骨髄バンク募金の贈呈式



募金活動の報告をするポスター

募金を継続し、集まった募金を寄付することにしたという。

#### 沖縄県骨髄バンクを支援する会に 寄付するために募金活動を継続

そこには、沖縄で生まれた企業であり、沖縄の地域の人々に愛されてこそ企業活動を続けていくことができるのだから、地元のためにできることをしていこうという、社会貢献や地域貢献に対する会社としての思いもあった。

全店(現在13店)のカウンター及び休憩室や事務室に継続して置かれることになった募金箱の募金は、2年ごとにまとめられ、沖縄県骨髄バンクを支援する会に贈られているが、これまで2010年10万4,600円、2012年25万円、2014年13万1,032円、2016年30万円の合計78万5,632円が寄付された。寄付後には、領収書とお礼の手紙を掲載したポスターをホールに掲示し、協力してくれたお客様に感謝とともに報告するようにしている。

さらにピータイムでは骨髄バンクへのドナー登録も積極的に勧めている。現在、従業員の14名がドナー登録を済ませているが、2011年には沖縄県骨髄バンクを支援する会から連絡があり、ドナー登録をした従業員のうちの1名が実際に福岡に行き、骨髄液の提供を行った。こうした場合の交通費などの費用は会社が負担することになっている。

仲間を助けようという思いで始まった募金活動は、骨髄バンクを支援するという社会性の高い活動に広がったわけだが、「まさか私どもの活動が、今回、顕彰事業の最優秀賞を受賞するとは思っていませんでした。これを機会に一層、この活動を盛り上げていければと思います」と、ピータイム統括本部の大城朝朝さんと社長室の奥儀良人さんは話す。こうした活動の土台には、地域密着型の社会貢献活動の実践があり、ピータイムではクリスマスシーズンに端玉景品(お菓子)を保育園や児童養護施設などに届ける活動、ホールが立地する地域の祭りや行事への参加、自動販売機メーカーとの協働でサンゴの植え付けを行う団体への寄付や体験会への参加などに積極的に取り組んでいるという。